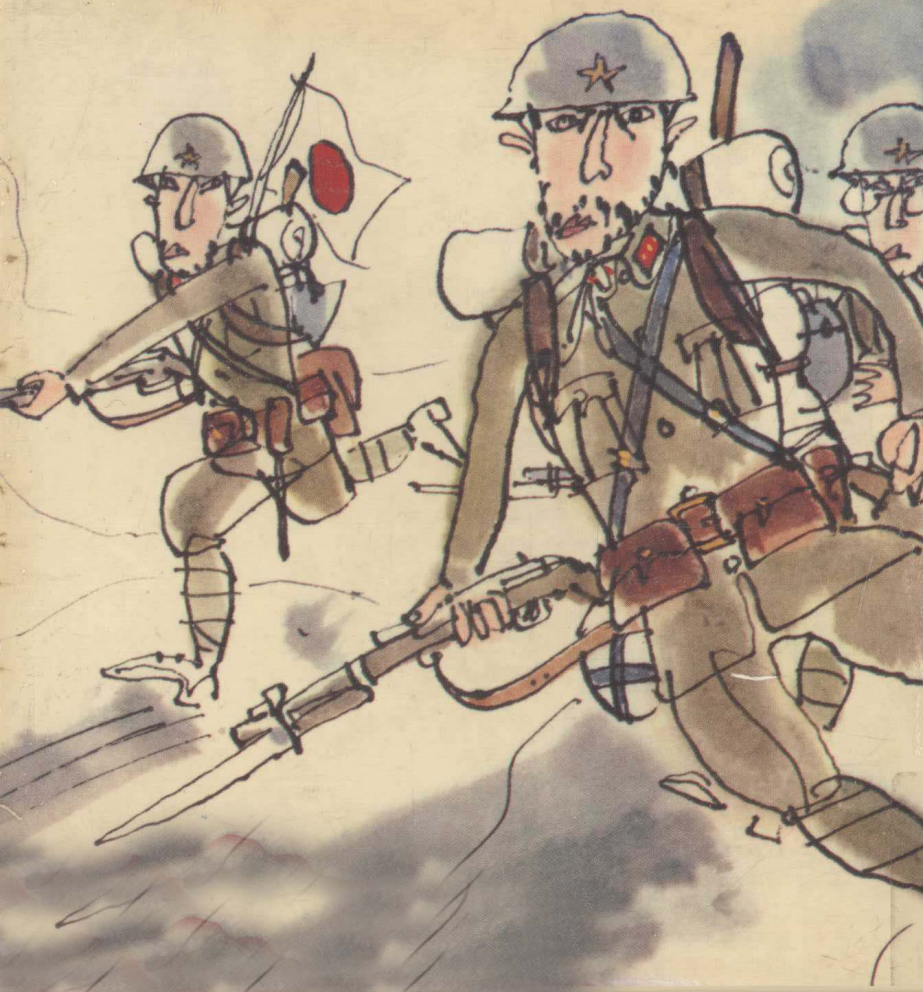


分隊長の手記

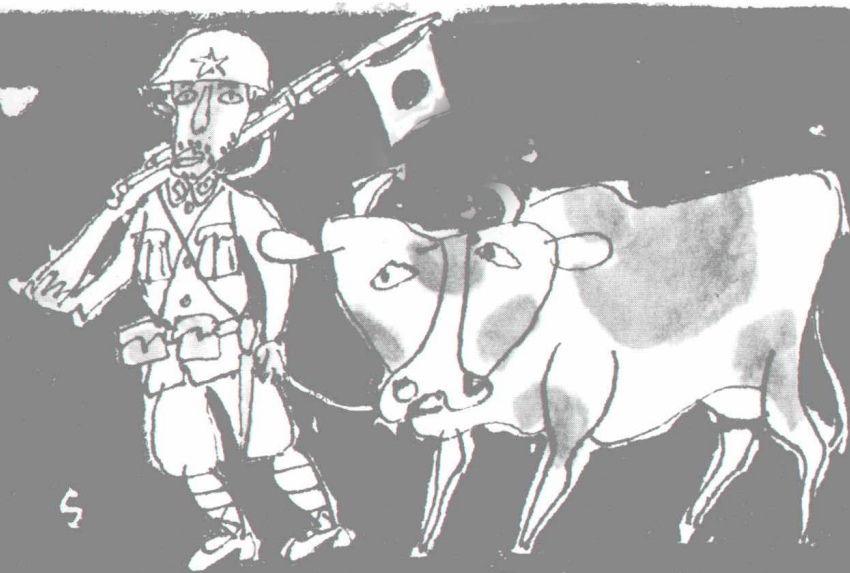
棟田博兵隊小説文庫 1

ほか四編



棟田博兵隊小説文庫 1

分隊長の手記



光人社版

棟田博兵隊小説文庫 Ⅰ 著者 棟田博

昭和四十九年八月二十二日 第一刷

昭和五十二年十二月六日 第四刷

定価 九〇〇円

発行者 川島裕

東京都千代田区九段北一丁目九番十一号

発行所 株式会社光人社

電話 東京二六五一八六四一六

振替 東京七五四六九三番

本文印刷 慶昌堂印刷株式会社

色彩印刷 有限会社興仲社

製本 松栄堂製本所

〈検印廃止〉

乱丁・落丁のものは本社またはお買
求めの書店でお取りかえ致します



0393-43001-2241

棟田博兵隊小説文庫 Ⅰ 目次

分隊長の手記 5

中華理髪店 151

第一部 中華理髪店 153

第二部 剃光頭 171

朋友 187

鶏をめぐりて 205

奉天曾我 217

解説 哀鍋元之 279

棟田博兵隊小説文庫 Ⅰ

カバ！・扉絵
下高原
千歳

分隊長の手記

戦線へ急ぐ

降るかと思ればやみ、やむかと思えば降り、昨夜は危ぶまれたが、今朝は、雲も見せぬ快晴である。このころの晴れた空の、深――と抜け透った深い色は、内地では見かけぬもので、空に「果て」がないというのが、よく納得できるような色である。

内地流にいえば、いまは晩秋爽涼とでもいうころであらうが、昼間の行軍にはりんと汗が流れ、陽だまりで飯盒をあけると、わぁんと蠅がたかる。かと思うと、夜は冬の寒さで、火の気がなくては過ごせぬというありさま。いっこうに「晩秋」らしいものは感じられぬ。いつでも知らぬ間に、こっそり季節がつぎに移っていて、面喰わせる土地柄である。だが、僕らは、十日ほど前に支給された冬服を着ている。さては、冬が来るなど知ったわけだ。

けさのおかずは豚肉の塩いりである。これは昨夜、三コ分隊共同で一頭屠ったのを分けあい、昨夜食い、けさ食べて、残ったのは飯盒へ詰めこんだ。昼食用である。例によ

り、猪にまがう黒色の豚であった。かなり図体も大きく、張りきった牝なので、ゆうべは勢いよく暴れまわった。各分隊とも、えり抜きの名手が出場して、こいつにあたったが、暗くもあり、足場も悪く、だいぶ骨が折れたらしく、ものすごいわめきが、たびたび闇の中を貫いて聞こえた。あの滑稽な鼻からあげるわめきであるのに、悲痛きわまりなく、じつと聞いていると、こちらがやるせなくなる。僕らは手分けをして、その間に野菜ものの探索にかかった。なにもない。ついに一本の葱にもありつけなかった。いつも感心しながら腹が立つことは、土民の避難の上手なことだ。

われわれの部隊がこの陵県に着いたのは昨日の夕方、さつそく、この家にはいりこんでみると、鍋の中に蒸したきつま芋があり、つまんで食べてみると腐ってはおらぬ。しかし、念のため、竈の下に手を入れると、灰にあたかみはまだ残っている。彼らが逃げさったのは、おそらく数時間まえで、それは非常な混乱であつたろうと思われるのに、以前からの空家ではなかったか、と思わせるほど、家の中には一物もとどめていない。オンドル上のアンペラまで持ち去り、じつに行きとどいた空っぽぶりである。山東省は匪賊の本場で、満洲でさえも山東馬賊というと、その

剽悍をおそれられていると聞く。おそらくこれらの匪賊どもが永年の間に、この辺の土民にこの完璧の逃去ぶりを習得させたものである。かかる状況の中で、わが分隊が、若干の塩を探し出したことは、まことに天の助けの幸せだった。黒い小さな、一輪挿しみたいなきたたない壺の中で、汚れて薄墨色になった砂のような岩塩である。僕らは大切にしようぜと言ひ合ひ、できるだけ儉約して、豚肉に振りかけ、いささか残ったのを大切に紙にくるみ、持ってゆくことにした。

出発。午前六時三十分。東門の内外に車輛部隊がごったがえして、馬があちでもこちちでも白い息を煙みたいに吐いている。われわれの部隊は、そこを通り抜け街道に出る。一昨日、土橋街を発ってから、ずっとそうであるが、ありがたいことにきょうも道がよい。小隊長の話では、この道路は韓復榘が改修させた臨邑へつづく軍道路であろうとのこと。路幅も広く、両側にはずっとアカシアの若木が植えてある。この方面では珍しい並木道で、これでほこりさえ立たなければ、内地と変わらない。きょうはこの道路を鳳凰店に進み、そこから南に振り、馬腰塢という部落へゆくんだという。行程はわずかであるが、友軍はそっちの方に全然出ておらず、敵味はつきりせぬということがど

こからともなく伝えられた。だが、道路は破壊されてもないし、砲声もきこえず、壕も見かけない。

アカシアの並木道を、朝の陽の光を浴びて進軍する兵隊はみなのおんきそうである。まだ足も肩も疲れてないので、さかんに談笑しながら歩いている。これは敵地に踏みこんでいる兵隊のようではない。そっくり秋季演習である。付近に日本の薬屋根が見え、日の丸が掲げてあったら、いよいよ秋季演習だ。しかし、周囲をとりまく風景は、あいも変わらずぬはてしもない煙で、揚柳の群れと泥土の家が、忘れられたもののように、あちこちにぼつん、こちちこちとぼつんとかんで見える。このあたりには、丘陵もなく、高粱も麦もない、畑はたくましい裸をむき出しに、限りなくつつき、遠くかの美しい空と合している。人影もない。犬さえない。丸裸の畑が、黙々として、ふてぶてしくどこまでも拡がり抜いているのは、なにか異様な無気味さである。

城外を千メートルぐらいたとところ、くずれかかった石橋がかかっている、その袂に下士哨が出ていた。高粱がらの束をピラミッド形に立て合わせて哨舎にし、哨舎の前に壕がいくつも掘られている。いずれも立射の深さで、両端に東方へ銃口を向けた軽機関銃が二銃すえられている。軽機も弾薬匣もしつとりぬれている。われわれの部隊が通

りかかると、その哨舎から、兵隊が十五、六人ばらばら飛び出し黒い顔を並べてみせた。焚火もできず、一晚中ふるえながら突っぱっていたのだらう。ほとんどが、支那人の大綿入おびわだんを着込んでいるので丸くふくれている。中に一人、どこで拾ったものか、姑娘クニヤンの桃色の首巻から、黒い顔をぬつと出している奴がある。

「おい、何中隊だ、何中隊だ」

とそれらがきいた。だれかが答えると、

「谷隊タニだと。それじゃ、だれそれがおるだらう」

「だれはおらんか」とつぎつぎに名前をあげる。「よう」

と答え、「おう」と顔を合かし、

「元氣か」「元氣だ。氣をつけるよ」と、どなり合っているものもある。兵隊はいつでもゆき合っても、すぐに隊名をきき合い、知人をたずね合う。会っても別にこれという話はない。

「元氣か」と問い、「そうだお前は」と問い返し、「おれも元氣だ、氣をつけてゆこうな、死了スエラ々々スエラにならんようにな、お互い待つとるもんがおる」「そうだ、そうだ。ではまた会おうぜ」と別れるのである。

会えばそれだけの会話しかないが、兵隊はなにか重大な要件をもっているごとくに、熱心に探しまわり、根氣よく

たずね歩く。こんなふうに聞き合わせをやっていると、無難作な声で、「おう、あれは戦死したぞ」と、聞かされることもある。そのときはちよつと驚く。しかし、どうも本当のように思えず、びつたりと感じられないで、悲しめなくて困るのだ。そういうときの困った宙ぶらりんの氣持は当分つづき、やがて忘れる時分になって、あいつもこの世におらんのだ、とやつと納得がついてくる。この妙な氣持は、戦つたものでないとわからない。

陽が高くなるにしたがつて、ほこりがひどくなった。後方から命令が飛んできて、部隊は真ん中から左右へ二つに分かれ、道路の兩端りょうはしを歩いてゆくことになった。風がないので、もうもうたる黄塵は、われわれにどこまでもつきまとつてくる。きなくさい空氣を吸いながらの進軍である。そろそろ背囊はいのうが重くなりはじめ、足がいたくなり出したので、いつのまにか、だれも物を言わなくなっている。だれもかれも、ほこりで化粧され、それを汗がぬらし、まことに面白い顔になっている。だが、われわれは殊更ことごとらしく顔を見合わせ、笑うというようなことはない。みな、あたり前のような顔つきで、ペツペツと黄色い唾を吐きながら、前の者におくれないように、一生懸命に歩いているだけである。

先頭の方で、戦車の無限軌道のあとが見えると騒ぎだした。まもなく後方から、友軍の軽装甲車が先行している、という話が伝わってきた。なるほど、鳳凰店に着くと、「天羽」と部隊名を尻にくっつけた軽装甲が六台、日の丸の旗を立ててならんでいて、五、六人の土民がこれも日の丸を片手に、お茶を接待しながら、ものめずらしげに、へんてこな鉄の怪物を眺めている。いずれも老頭児ばかりで若いものはひとりもおらぬ。かなり大きな部落である。おそらく百戸はあろう。しんとしている部落の中で、急に犬があたりこちで吠え立てた。りっぱな望楼が三つ四つこの部落にはある。気ぜわしい犬の吠え声の中で、不意にどこかで鶏がのんびりと時を告げて鳴いた。どういうわけか、そのコケコウーコというなごやかな声が、むやみにおかしくて、僕は顔を見合わせ、ふき出した。

「おい。そのまま聞けい、現在十一時二十五分である。われわれは十二時三十分この地を出発、馬腰場に向かう。ええか、一時間しかないぞ。まず昼食を食べる。それから背囊は現在地に残して、全員軽装になる。もちろん、器具は持ってゆくぞ。忘れるな、背負袋には携帯口糧甲二日分および乙一日分だ。わかったな。現在背囊に入組にしている小銃弾、手榴弾および擲弾筒弾は、かならず出して携行

するんだぞ。行程は三里しかないんだ。わかったな。わかったらすぐ準備にかかれ。ちよつとまった。各小隊とも分隊ごとに、背囊監視者を一名あて出せい。早く出せい。監視者は飯をたべずにすぐ集まれい。所要の指示をする。おわり」

准尉代理をしている大和伍長が、こういう命令もってきた。さあ忙しくなったぞ、快々的快々的、兵隊は、道いっぱいに散らばって、背囊を降ろし、入組品を出し入れし、器具を解き、背負袋を降ろし、飯盒をがちゃがちゃと鳴らし、忙しくやり出した。僕の分隊は、足を痛めている大田上等兵を監視者に命じ、ここに残すことにきめた。飯を食いながら、われわれはこれからゆく馬腰場に敵がいるかいなかについて論じ合った。戦車の准尉がいうのを横で聞いたが敵はいないという話だぞ、とだれかが言えば、いやいらないなら軽装にさせるはずはない、いままで軽装になって戦闘しなかったことがあるか、などと、われわれは熱心にしゃべり合った。うららかな、少し暑いような陽が照っている。しかし、すわっていると、土の冷たさが尻へしみとおった。

時間がきた。出発だ。並木道に別れて、横にはいつてゆく。こんどはひどい道だ。畑と畑とのあいだを、うねくね

と曲がりに曲がついて、あるところでは広く、また急にせばまったりする。しかし、背嚢がなくなつたので、非常に楽だ。肩が、なんとも言えずころよい。みんなもそうだろう。見るからに素輕氣に歩いている。だが、またもや汗が流れて来だした。真昼の太陽が暑く照りつける。十月二十三日の太陽とは思えぬ暑さだ。人參畑を見つけて、ばらばらと兵隊が殺到した。僕も走ってゆき、試みに一本抜いて嚙じってみる。うまい。水々として甘くておいしい。五、六本引き抜き、ぼりぼりと嚙じりながらゆく。

「そんなに食べると、また赤痢にやられるよ」

と、原田看護兵がおどかしをいう。

「冗談いふな。そうそう赤痢にやられてたまるもんか。それより欲しければ欲しいと正直に申せ」と一本やると、「謝々」とばかり涼しい顔で、ぼりぼりといひ音を立てながら、どんどん行つてしまった。

「おッ。これア珍しい。分隊長、分隊長」

と、堀家一等兵が、あわただしく叫んだ。

「なんだ、花嫁コ」(花嫁コとは渾名である。彼は若い大工さんで、花嫁をもらつて三月目に召集されて来ている。彼は大隊長と一様の髯を、さもいかめしそにおつ立てながら、全軍の同情を「新婚三か月」で買っているおもしろ

い男である)。花嫁コ一等兵の指さす指のさきを見ると、なるほど、これは珍しくも杉の木が、すくすくと畑の中に十数本立っている。

「おーい。杉の木があるぞ」「どこにあるんだ」「あそこを見い、あそこを」兵隊は急にうきうきとどなり合い、杉の木をさした。そこは墓地らしく、いくつも土饅頭が見える。

「ほう!」「ほう!」と、僕らはあつけにとられ、行き過ぎてからも、しだいにうしろに遠ざかる杉のひと群れを、幾度となく振りかえつた。親しいものに会つたように身内にあたたかいものを感じた。

馬腰場にも敵はおらぬ、すでに南方へ向けて逃げ去つたあとだと、どこからか急に話し出されて、兵隊の間に伝わつた。それは事実で、やがて、ひっそりとした町にきたと思つたら、それが馬腰場だった。午後四時すぎである。

午後の陽があかるく、しいんと家や路を照らしていて、見たすかぎり人影はない。商家らしい構えのならんでいる広い道路を進んでゆくと、横丁で姿を見せず犬が吠え立てる。住民は全部、避難してないのだと思つていたら、大きな門のある家の前に、中年の支那人が数人いて、高梁がらで編んだ大きな籠に、落花生を山と盛り上げ、われわれ

がゆくと、どこからかヒョイと日の丸の旗を出し、落花生の山にそれを立て、急ににやにやと笑顔になって、口々に「進上々々」とやり出した。戦帽を脱いで汗をふいていると、ぬからず「大人。辛苦辛苦的」とぬかすやつもいる。

一見して、この支那人たちは、農民ではないとわかる。手も顔も服装も、きたなくない。しかし、いかにもなにかずる気な、柔らかな物腰から、僕はなぜともなく油断のできないものを感じた。

兵隊はわいわいと大喜びだ。汚れた無数の手が、落花生に伸びた。鉄兜ですくうものもある。はるかの後方から、噂を聞いて、宙を飛んで駆けつけ、ふうふうと苦しがりながら、落花生をつかんでいるものもある。気がついてみると、大きな門は警察局のである。門柱に『山東省平原縣馬場警察局』と達筆をふるってある。僕が門をくぐろうとすると、なんと思つたのか、支那人どもが急に不安な顔をして、「大人、甚麼？」と言う。なにがなんだ？　と言うつもりで、声を荒げ、「甚麼？　甚麼？」とやったら、とたんにまた、ニヤニヤと笑顔をとりもどして、「好々的、好々的」と頭を下げた。達筆の門をはいると、正面に衝立のごとく、一間四角ぐらゐの壁が立っている。浅黄色の地壁に、白で大きく青天白日が描いてある。中央が広場にな

っていて、三方に小部屋がいくつもあるのだが、衝立のりっぱさに似ず、粗末な建物である。左右のいくつもの部屋が、つまり種々の事務所らしく思われるのだが、机も椅子もどこへ持ち出したものやら一つもなく、どの部屋もどの部屋も、書類や帳簿類が足の踏み場もないほど散乱している。ある部屋でなにか書類と衣類を燃やした跡の灰が残っていて、天井がくすぶっている。これといって珍しいものは一つもない。つきあたりは留置場らしい。鶏小舎みたいに金網が張ってある。内部は土間で、扉はいずれも開け放されていて、中に一つ警官の帽子が捨ててあった。羅紗かと思つたら、小倉である。天井は緑色で、帯は白色、縁は黒く、徽章は青天白日、ただしブリキ製である。

名前が三つ記されている。二つは墨で消され、残りは永売何とか書いてある。馬腰場の警官永某はよほどの大頭と見え、僕が戦帽の上からかぶってもブカブカであった。留置場の中に、あちこち無数に落書がある。いろんな文字が見えるが、意味はわからない。絵はわかる。下手くその春画が一つ、あくどく描かれてあった。しかし、その画からは、ただ無気味な感情を受けただけである。

急に表が騒がしくなった。集合だと思い、急いで外へ飛んで出ると、集合ではなく、例の支那人どものひとりを、

本部の通訳が、恐い形相でにらみつけ、鋭くなにか叩きこむような調子で尋問し、腕を捕え引きたてて行こうとするところであつた。すると残りの連中が、すわ一大事というようすで、通訳の横に回り、前にふさがり、三拝九拝し、口々に何事かしきりにしゃべり立てる。それは、じつに一秒の休みもなく、たてつづけにしゃべり抜くので、思わず「黙れッ」と大喝したくなるほど、聞いているほうで気ぜわしい。兵隊は又銃線のあちこちにひっくりかえつて、落花生の皮をペツペツと吐きながら、それを見ている。そのうちにだれかがついに、破鐘^{やれやれ}声を出し、「やかましいッ。コラッ」と怒鳴りつけてしまった。すると、これがよくきいて、かれらは不安な表情になり兵隊の方を眺め、ピタッと、夕立がやんだごとく口をつぐんだ。急に静かになったのが、まが抜けたようにおかしく、兵隊がどツと笑つた。通訳はその間に例のひとりを引き立てていった。その通訳の背の低い姿と、支那人の背の高い後姿とが街角に消えると、残りの支那人らは急にやきもきしはじめ、空ッぽになつた落花生の籠のかたわらに輪になり、最初はひそひそと話をしていたが、しだいに手を振り口をとんがらせて、熱心に語り合い、しまいにわれを忘れて、例のかしましく気ぜわしいおしゃべり夕立をまた激しく降らせた。

「いったい、いまの支那人^{ニイコッ}、どうしたんだ、密偵か」と、そこらに寝ころがって、落花生の皮を胸や前盒^{ぜんかう}のくぼみに乗つけている戦友たちに、たずねまわつてみたが、だれも知らんと言う。

五時近くになつて、設営者を出せ、と言つてきた。業合^{なりあひ}一等兵を出した。風が少し出てきて、寒くなった。迫る夕闇の中で、われわれは設営者に指導され、わり当てられた家にはいった。あちちでもこちちでも、焚火がさかんにはじめられて、ぼうと明かりが空にあがる。「井戸を知らんか」「おーい。何分隊」「だれそれ」とか、さまざまに兵隊が呼び合う声が聞こえる。

「分隊長どのう、集合です」

と、小隊の伝令が呼びにきた。第一分隊の小隊長のもとへゆく。

「敵は一昨日、北方より来てこの地を通過、南方へ退却せり、ということだ。将校斥候が南方へ出たが、これの報告もまず異状なしという。しかし、歩哨は厳に警戒をやらないかん。各宿舍ごとに歩哨を立てろ。明日の出発は、午前七時三十分。ひとまずまた鳳凰店^{ほうおうてん}まで引き返すはずだ」

その他は、いつもの宿営の注意事項であつた。夜にはいい、しだいに風が加わり、楊柳のざわめきが、

波のような音を聞かせる。横になった。寂しい波の音の中で眠った。

交替して帰った歩哨が、「寒い、寒い」とつぶやきながら家の中で焚火をやり出したので、けむたく、幾度も咳が出て困った。

「おい。あんまりくすぶらせるなよ」と言うのと、

「なんだ分隊長、起きとったんか、どうじゃ、一本進上しんじよう」と森本一等兵が枕元へ巻煙草まきたばこを一本投げてよこした。みると、ゴールドデンバットである。

「おッ、これア内地の煙草じゃないか、どうしたんだ」と、僕は起きあがって、焚火の側にいった。

「歩哨に立つとるとな、行李の下士官が巡察で通りかかったの、御苦労さんと言うて三本くれたんだ」

と言う。僕は何か月目かのバットに、おもむろに火を点じ、フウと吸い、フウと吐いた。

「ふむ。森さん、テンホウだ、やっぱり内地の煙草はええのう。テンホウだ、テンホウだ」と、なんべんもくりかえした。みなのにびきと歯ざしりと風の音との、一種異様な静寂な騒音の中で、僕はひしひしと迫る郷愁をもてあましながら、ゴールドデンバットを根元まで吸いつくした。

風はますますつのってきた。

馬腰塙の戦闘

夜が明けても、いっこうに風は衰えていず、ごみとも木の葉とも屑ともつかぬものが、そこらじゅうに飛びまわっている。空が灰色である。

水瓶の高梁たかばがらの蓋が吹き飛ばされているので、水は、せっかく汲んでおいたが、ごみだらけだ。

外へ出ると、顔になにかしらがしきりにあたり、口の中がすぐジャリジャリする。飯を炊いていた亀さんラッパ兵殿が、「わあー、たまらん、たまらん」と顔中を涙でぬらし、家の中から飛び出してきた。

「煙出し穴へ逆に風が吹きこんできやがるんだ。火は燃えあがらずにくすぶるばかりなんだ。やりきれん。そうそうは涙ばかりも出したられん、分隊長が死んだとき泣かにならんぞな」

と、赤い目をこすりながら僕を見て笑う。

「縁起の悪いこと、朝からやめてくれ」と言い、ようすを見に家の中にはいりかけたが、そのすごい煙でたちまちむ